九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[024]九州大学教育社会学研究集録表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/5068314

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 24, 2022-09-30. Seminar of Educational Sociology Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studiess Kyushu University
バージョン：
権利関係：

修士論文梗概(2022 年度)

大学スポーツにおけるアスリート学生と指導者の相互作用の社会学
－競技成績規定要因における指導者の関与を中心に－

キーワード：アスリート学生、ロジスティック回帰分析、相互作用、教職員指導者、自律的学習姿勢

教育システム専攻
一ノ瀬　大一

１．本論文の構成

本論文の構成について、その全体が概観できるよう、以下に主要な目次を示す。

序章　大学とｱｽﾘｰﾄ学生の関係から見える問題構図
　第１節　問題の所在
　第２節　先行研究の検討
　第３節　大学とｱｽﾘｰﾄ学生の関係の再審－指導者の関与という分析視角
　第４節　研究の課題とﾘｻｰﾁｸｴｽﾁｮﾝの設定
　第５節　本論文の構成
第１章　本研究において使用するﾃﾞｰﾀと変数の設定
　第１節　調査対象およびﾃﾞｰﾀと変数の設定
　第２節　各独立変数と大学の競技実績との関係
　第３節　調査項目を用いた因子分析
　第４節　探索的因子分析結果から見えてきたｱｽﾘｰﾄ学生視点
第２章　ｱｽﾘｰﾄ学生の競技成績規定要因
　第１節　回帰分析に使用する変数について
　第２節　競技成績規定要因
　第３節　競技成績につながる指導者の関与と自律的学習姿勢
第３章　ｱｽﾘｰﾄ学生の出場選手選出規定要因
　第１節　出場選手選出規定要因
　第２節　出場選出につながる指導者による指導と目標設定
第４章　ｱｽﾘｰﾄ学生の競技への取り組み方に関する規定要因
　第１節　競技への取り組み方に関する規定要因
　第２節　競技への取り組み方につながる指導者の指導と目標設定や自律的学習姿勢
第５章　ｱｽﾘｰﾄ学生の学業への取り組み方に関する規定要因
　第１節　学業への取り組み方に関する規定要因
　第２節　学業への取り組み方につながる競技への取り組み方
終章　大学とｱｽﾘｰﾄ学生の共犯的搾取構造解決の糸口
　第１節　結論
　第２節　今後の課題

２．本論文の概要

序章－大学とｱｽﾘｰﾄ学生の関係から見える問題構図

１）問題の所在－大学にとってのｱｽﾘｰﾄ学生／ｱｽﾘｰﾄ学生にとっての大学という問題枠組み

我が国のｽﾎﾟｰﾂの発展や競技力の向上において、大学ｽﾎﾟｰﾂやｱｽﾘｰﾄ学生の果たしてきた役割は大きいが、大学ｽﾎﾟｰﾂに関しては、基本的に自主的・自律的活動（正課外活動）であるとの認識によって、大学は積極的に関与してこなかった実態がある（文部科学省,2017）。大学はｱｽﾘｰﾄ学生が学業と競技の両立を実現するために修学上の配慮をすると同時に、将来に向けたｷｬﾘｱ形成支援を行って社会に送り出すことが期待されている（文部科学省,2017）。しかしながら、この期待とは裏腹に、ｱｽﾘｰﾄ学生は、競技に集中しすぎるが余り、低修得単位などの学業不振に陥り、大学を卒業することができない事例が散見される（荒井他,2018）。つまり、ｱｽﾘｰﾄ学生については、競技を優先しすぎるが余り、学業を疎かにしている点が問題として浮き彫りになっている。

さて、ｱﾒﾘｶの大学ｽﾎﾟｰﾂにおける競技横断的組織であるNCAA は、競技の安全性を高めるﾙｰﾙを定めるなど、教育志向の純然たるｱﾏﾁｭｱ活動を装っているが、商業的側面によってますます浸食され、大学ｽﾎﾟｰﾂ競技における勝利が大学にとって宣伝の好機であり、大学知名度の向上、学生募集や寄付金集めの手段になっていると論じられている（Gerald et al,2017＝宮田訳,2018,pp.17-26）。要するに、ｱﾒﾘｶの大学ｽﾎﾟｰﾂは、NCAA の本来の目的とは裏腹に、企業ｽﾎﾟﾝｻｰの露出目的などによる商業主義的な側面が強く、大学ｽﾎﾟｰﾂの人気を高め、多くの収入を得ることを念頭においた勝利至上主義にあると言える。ｱﾒﾘｶの大学ｽﾎﾟｰﾂの商業化について考察したZimbalist（1999）は、ｱｽﾘｰﾄ学生を利用して収益を最大化しており、これはｱｽﾘｰﾄ学生からの搾取ではないかと、多くの人が不満を抱いていると報告している。

これを踏まえれば、大学側の思惑としては、高い競技

成績を残すことに注力して競技力の高い選手獲得や環境整備、注目度の高いｽﾎﾟｰﾂにおけるｱｽﾘｰﾄ学生の活躍により、大学知名度の向上やﾌﾞﾗﾝﾄﾞｲﾒｰｼﾞを高め、第一義として学生募集効果を期待している感が否めない。

以上のことから、「大学にとってのｱｽﾘｰﾄ学生」という視点から見える問題点は、ｱｽﾘｰﾄ学生が高い競技成績を残すことを通して、大学の知名度やﾌﾞﾗﾝﾄﾞｲﾒｰｼﾞの向上を目的に強化支援策を展開し、受験生確保や志願者数増加といった大学経営面への効果を期待している点であると考えられる。それに対して、「ｱｽﾘｰﾄ学生にとっての大学」という視点から見える問題点は、主に高等学校時の競技力が高いことが評価され、学力選抜を経てなく面接や書類審査で合格し、入学したことによって、高い競技成績を残すことに加えて、将来はプロや実業団で競技を継続することを目標とした競技中心の学生生活であっても、学業面は補習教育等で何とかなるのではないか、ひいては、何とかしてくれるだろうという考え方が生じてしまう点である。

２）先行研究の検討－ｱｽﾘｰﾄ学生視点と大学側視点との違いに関する研究整理

大学ｽﾎﾟｰﾂに関しては、ｱｽﾘｰﾄ学生視点と大学側視点の違いに焦点を当てた先行研究を確認する必要がある。

まず、ｱｽﾘｰﾄ学生視点における先行研究（Gayles,2009, Sauer et al,2013,束原他,2019,古谷・粟木,2015,長倉,2011）では、目標設定や大学入学後の学業と競技の成果が大学卒業後のｷｬﾘｱに影響することが指摘されており、特に競技力の高いｱｽﾘｰﾄ学生は、競技活動中心の学生生活をｲﾒｰｼﾞしている者が多く、学業面に対する意識が低い一方、競技活動が原因で授業に参加できないなどの影響はほとんど見受けられなかったため、ｱｽﾘｰﾄ学生自身における意識向上が重要であると指摘されている。

次に、大学側視点における先行研究（Kuh,2013,小方,2008,堺他,2015,山田,2018,石黒,2019,上田,2018,坂口他,2022）では、学生を成功に導く活動を意味する「学生ｴﾝｹﾞｰｼﾞﾒﾝﾄ」を高めるための教職員の関与、ﾃﾞｭｱﾙｷｬﾘｱ意識の涵養、高等教育の教育目的を理解している指導者のｱﾌﾟﾛｰﾁが、ｱｽﾘｰﾄ学生の学生生活の充実や卒業後のｷｬﾘに影響することが指摘されている。このことから、大学側は、勝利第一主義の商業主義的な方針ではなく教育主義的な考え方、すなわち、競技力や学業に対する意識が高い選手を獲得し、高い競技成績のみならず、学業基準の設定や先述した方針を理解した指導者の配置やｱﾌﾟﾛｰﾁを行うことが必要であると考えられる。こうした研究がある中で、大学にとってのｱｽﾘｰﾄ学生のあり方、ｱｽﾘｰﾄ学生にとっての大学のあり方を問い直すことが重要なのではないか。

３）研究の課題とﾘｻｰﾁｸｴｽﾁｮﾝの設定

大学において高い競技成績を残すためにも、高い競技力を持ったｱｽﾘｰﾄ学生を入学させることさえできればよいかということを、ｱｽﾘｰﾄ学生と指導者の関係性から問い直すのが研究課題である。社会や人間は固定したものではなく相互作用を通じて形成され変化していくものであり、相互作用論は社会構造や行為者を固定したものとしてではなく、相互作用を通じて互いに変化し生成していくものとみる関係的・過程的な視点であると述べている（宝月,2018,pp.128-129）。言い換えれば、大学側がｱｽﾘｰﾄ学生に対して関与することによって変化するものは何か、どのような施策やｱﾌﾟﾛｰﾁがｱｽﾘｰﾄ学生にどのように影響しているのかが、この研究を通じて明らかにしたい部分である。これを踏まえた本研究のﾘｻｰﾁｸｴｽﾁｮﾝについては、次のとおりである。ｱｽﾘｰﾄ学生の元々の競技力の高さが競技成績に一定の影響を与えているが、その影響を統制しても、ｱｽﾘｰﾄ学生の競技への取り組み方や指導体制が競技成績に影響しているのではないか。学業への取り組み方は、競技成績にも何らかの効果をもたらすのか。ｱｽﾘｰﾄ学生の競技成績規定要因を考察することによって、先述した大学とｱｽﾘｰﾄ学生の共犯的搾取、被搾取関係とも言える状況を改善する手立てについて検討する。

第１章－本研究において使用するﾃﾞｰﾀと変数の設定

本研究の目的に沿って、競技力や競技への取り組み方、学業への取り組み方、指導体制など、多角的な視点や様々な状況で活動しているｱｽﾘｰﾄ学生の集団のﾃﾞｰﾀが必要であるが、競技活動重視のｱｽﾘｰﾄ学生が多いと言える体育大学、体育系学部や競技重視の単科大学のｱｽﾘｰﾄ学生の集団のﾃﾞｰﾀでは、ﾄｯﾌﾟｱｽﾘｰﾄ学生に偏ったﾃﾞｰﾀが多くなることにより、一般化可能な知見を引き出すことが困難になる。大学ｽﾎﾟｰﾂ強化部の選定、ｽﾎﾟｰﾂ推薦入試制度の導入、指導体制の整備、奨学金制度の構築、学習支援、学業指導など、大学ｽﾎﾟｰﾂ支援体制を構築している九州地区の中規模総合大学であるＡ大学体育会系ｻｰｸﾙに所属しているｱｽﾘｰﾄ学生をｻﾝﾌﾟﾙにすることにより、各種施策の効果を検証しやすいﾃﾞｰﾀを得ることができると考えられる。

ｱｽﾘｰﾄ学生が在籍している団体競技のある A 大学体育会系ｻｰｸﾙのうち、回答協力の得られた体育会系ｻｰｸﾙは、16 ｻｰｸﾙであり、調査期間は 2021 年 8 月 1 日から同年 8

月 31 日までとした。回答者数は、男性 502 名（83.4%）、女性 100 名（16.6%）の計 602 名であり、外れ値や記載ﾐｽなどを分析の対象から除外した者を除くと、有効ｻﾝﾌﾟﾙ数は、男性 433 名（85.7%）、女性 72 名（14.3%）の計 505 名である。また、母集団とｻﾝﾌﾟﾙで極端に大きな違いは見られなかった。加えて、回収率は 80%を超えるなど、高い回収率であった。

探索的因子分析の結果、最初に「競技への取り組み方」については、競技活動に対する自身の真面目な行動を示す因子である「競技因子①（真面目）」、ﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽ向上のために自らの創意工夫を示す因子である「競技因子②（自己工夫）」、競技目標設定や達成に向けた行動を示す因子である「競技因子③（目標設定）」の３つの因子を抽出した。次に、「学業面」については、自身の学業に関する取り組み方を示す因子である「学業因子①（自律的学習姿勢）」、指導者以外の教職員からのｻﾎﾟｰﾄを受けていることを示す因子である「学業因子②（指導者以外の教職員からの影響）」、ｻｰｸﾙ以外の友人関係を示す因子である「学業因子③（ｻｰｸﾙ以外の友人からの影響）」の３つの因子を抽出した。最後に、「指導体制」については、競技面における指導内容を示す因子である「指導者因子①（競技面）」、学業面における指導内容を示す因子である「指導者因子②（学業面）」の２つの因子を抽出した。なお、指導者因子①と②の比較的高い正の相関から、本研究では指導者の関わり方を競技面と学業面に切り分けて検討する必要があるが、ｱｽﾘｰﾄ学生視点では、競技面と学業面の指導について一体的に見えていることも考えられる。

第２章－ｱｽﾘｰﾄ学生の競技成績規定要因

「大学競技成績ﾀﾞﾐｰ」を従属変数として、第１章の探索的因子分析により抽出した因子を含めた回帰分析に使用する変数を独立変数とする二項ﾛｼﾞｽﾃｨｯｸ回帰分析を行い、ｱｽﾘｰﾄ学生が高い競技成績を残すためには、どのような要因が重要であるかを検討した。

二項ﾛｼﾞｽﾃｨｯｸ回帰分析結果から、高等学校時の競技成績、競技の経験年数やｱｽﾘｰﾄ奨学生であるといった高い競技力に加えて、学業面について自律的に取り組んでいること、および外部指導者ではなく、教職員指導者を配置していることが、大学入学後の高い競技成績を残すことに影響していることが示唆された。また、「競技因子①（真面目）」と大学入学後の競技成績との正の単純相関は、実際には他の変数の効果であるにもかかわらず、表面的には因果関係があるかのように観測される疑似相関の可能性が示唆される。加えて、変数間の単相関係数と偏相関係数を確認した結果、「指導者因子①（競技面）」と「指導者因子②（学業面）」は、大学入学後の高い競技成績を残すことに直接的ではないが間接的に影響していることが示唆された。加えて、学業面について自律的に取り組んでいることや教職員指導者を配置し、指導者が日頃から競技面や学業面などの指導・支援を行うことによって、ｱｽﾘｰﾄ学生自身が競技活動に真面目に取り組むことにつながっていることが示唆された。

第３章－ｱｽﾘｰﾄ学生の出場選手選出規定要因

そもそもｱｽﾘｰﾄ学生が高い競技成績を残すためには、出場選手に選出される必要があり、出場選手に選出された後に試合に出場することになるため、有意な変数の中でも、「出場選手ﾀﾞﾐｰ」に着目し、出場選手に選出されるためにはどのような要因が重要であるかを検討した。

二項ﾛｼﾞｽﾃｨｯｸ回帰分析結果から、高等学校時の競技成績といった高い競技力や大学卒業後にプロを目指すといった高い目標設定に加えて、教職員指導者を配置していること、および日頃から競技面および学業面の指導を継続的に行っていることが、大学入学後の出場選手に選出されることに影響していることが示唆された。なお、ｱﾙﾊﾞｲﾄ時間に関しては、ｱﾙﾊﾞｲﾄに没頭しているというよりは、競技と学業とｱﾙﾊﾞｲﾄといったﾒﾘﾊﾘのある時間の使い方をしていることが、大学入学後の出場選手に選出されることに影響していると示唆された。

第４章－ｱｽﾘｰﾄ学生の競技への取り組み方に関する規定要因

ｱｽﾘｰﾄ学生が競技に対して真面目に取り組むためには、どのような要因が重要であるかを検討した。

重回帰分析結果から、現在活動している競技の経験年数が長いことに加えて、指導者が日頃から競技面と学業面の指導を行っていること、競技に対して明確な目標設定や学業面に対して自律的に取り組むことが、競技活動に対して真面目に取り組むことに影響していると示唆された。また、「競技因子①（真面目）」と「教職員指導者ﾀﾞﾐｰ」との負の相関は、競技に対して真面目に取り組むことができていないｱｽﾘｰﾄ学生に対し、教職員指導者が継続的に競技面および学業面の指導を行っている実態に鑑みれば、長期的に手間暇をかけた指導を行う必要があるｱｽﾘｰﾄ学生であることを意味すると示唆され、教職員指導者の役割が多岐に亘ると言えるだろう。加えて、学業面に対して指導者以外の教職員から何らかの指導・支援の必要性がないこと、およびｱｽﾘｰﾄ学生自身が所属ｻｰｸﾙ以外

の友人関係が充実していないことが、競技に対して真面目に取り組むことに影響していると示唆された。

第５章－ｱｽﾘｰﾄ学生の学業への取り組み方に関する規定要因

ｱｽﾘｰﾄ学生が学業面に対して自律的に取り組むためには、どのような要因が重要であるかについて検討した。

重回帰分析の結果から、ｱｽﾘｰﾄ学生自身が所属しているｻｰｸﾙ以外の友人に相談できる環境であることや指導者以外の教職員からｻﾎﾟｰﾄを受けていることが、学業面に対して自律的に取り組むことに影響していることが示唆された。また、競技に対して真面目に取り組んでいること、および創意工夫しながら活動していることが、学業面に対して自律的に取り組むことに影響していることが示唆された。加えて、教職員指導者を形式的に配置するのではなく、日頃から指導者が競技面と学業面の指導を行っていることも、学業面に対して自律的に取り組むことに直接的ではないが間接的に影響していると示唆された。

終章－大学とｱｽﾘｰﾄ学生の共犯的搾取構造解決の糸口

図１のとおり、複雑な構造ではあるが、教職員指導者を配置し、指導者が競技面と学業面の指導を継続的に行っていることが、真面目に競技活動を行うことにつながり、真面目に競技活動を行っていることが学業面に対して自律的に取り組むことにつながり、学業面に対しても自律的取り組んでいる姿勢が相乗効果となって、大学入学後の高い競技成績を残すことへの規定要因になっていることが図として表現できる。これは、最初に想定したﾘｻｰﾁｸｴｽﾁｮﾝの中では想定してなかった結果であった。併せて、教職員指導者を配置し、指導者が日頃から指導を行っていることが、出場選手に選出されることにつながり、出場選手に選出されれば、大学入学後の高い競技成績を残すことにつながることが読み取れることも特筆すべき結果であると言える。

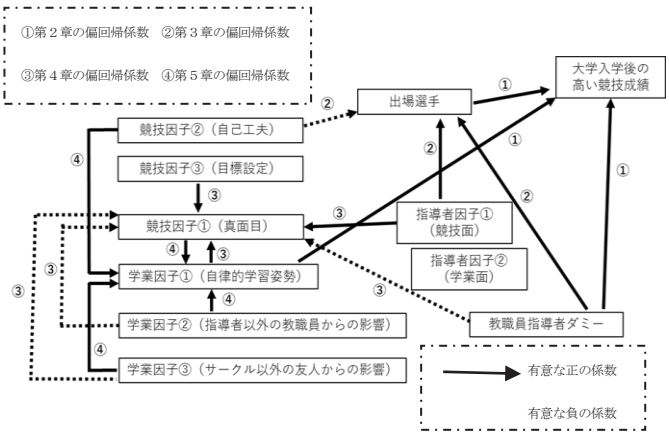

図１　各章を踏まえた競技成績規定要因モデル

本研究の結果と成果は、大きく２点が挙げられる。一点目は、指導者による日頃からの競技面と学業面の指導や教職員指導者の配置に加えて、直接的に競技成績に影響するとは考えにくい学業面に対して自律的に取り組んでいることが、大学入学後に高い競技成績を残すことに影響していることが明らかになった点である。二点目は、指導者による競技面と学業面における継続指導をすることによって、結果として競技に対して真面目に取り組むことや学業に対して自律的に取り組むことに影響している点である。

要するに、ｱｽﾘｰﾄ学生は、指導者との相互作用によって、自律心や自覚が芽生え、競技に対して真面目に取り組むことや学業面に対して自律的に取り組むことにより、ﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽが向上し、結果として大学入学後の高い競技成績の規定要因になっている構造が可視化された。

大学とｱｽﾘｰﾄ学生、指導者とｱｽﾘｰﾄ学生の関係性を踏まえれば、指導者が介在し、高い競技成績を目標として、学業面にも自律的に取り組むよう指導するといった競技活動に注力しながらも、競技活動に偏らない絶妙なﾊﾞﾗﾝｽの中で、ｱｽﾘｰﾄ学生に対する施策を展開することが、主体的な競技活動や自律的な学習につながり、結果として共犯的搾取構造解決の糸口になると言えるだろう。これまでも、大学はﾌﾞﾗﾝﾄﾞｲﾒｰｼﾞ向上させるためにｱｽﾘｰﾄ学生を獲得し、ｱｽﾘｰﾄ学生は競技中心の学生生活で学業に関しては大学側が何とかしてくれるだろうといった共犯的搾取構造とも言える状況について検討した批判的な研究は多くあった。しかし、本研究のような実証研究は少なく、大学側からのｱﾌﾟﾛｰﾁや指導者からのｱﾌﾟﾛｰﾁについて検討することによって、共犯的搾取構造を改善するための手立てを検討した点が本研究のｵﾘｼﾞﾅﾘﾃｨと言える。

３．主要参考文献

荒井弘和,深町花子,鈴木郁弥,榎本恭介,2018,「大学生アスリートのスポーツ・ライフ・バランスに関する要因－デュアルキャリアの実現に向けて－」『スポーツ産業学研究』28-2,pp.149-161.

Gayles, J. G., 2009, “The student athlete experience,” *New Directions for Institutional Research* 114: 33-41.

Gerald, G., Donna, L. and Andrew, Z, 2017, “Unwinding Madness: What Went Wrong with College Sports and How to Fix It” *Brookings Institution Press*. （＝2018, 宮田由紀夫訳,『アメリカの大学スポーツ－腐敗の構図と改革への道』玉川大学出版部,pp.17-48.）

宝月誠,2018,「相互作用論」日本教育社会学会［編］,『教育社会学事典』丸善出版株式会社,pp.128-129.
Kuh, G., 2003, “How are we doing at engaging students?,” *About Campus* 8(1): 9-16.